

宮城谷昌光風無支祈伝

八重代かりす

それは五帝が一人、虞舜の御世の物語。

その赤子は一足だった。

文字通り、足が一つしかなかったのである。

出産の苦痛から、正気に戻った女は悲鳴をあげた。

赤子は孺子となったが、あいも変わらず、一足だった。後の言葉を使えば、先天的な疾患の持ち主だったのだろう。幸いにも、その一足の孺子は父母に恵まれていた。加えて、足が一本欠けていることを除けば、概ね壮健であった。そのため、孺子は何とか生き延びることが出来た。その孺子は、弟よりも遅れてだが、杖を使って歩けるようになったし、妹よりもわずかながらだが、仕事も手伝えるようになっていった。

線言になるが、孺子は父母には恵まれていた。しかし、それ以外のものからは蔑まれていた。血縁者からすらだ。無理なからぬ話だろう。生きていくだけで精一杯の時代に、一足の孺子は足手纏いだったのである。蔑み故に友もない。いや、仮にいたとしても、五体満足な孺子たちが同じ感覚で付き合うには、その孺子の動作はあまりにも遅く鈍く弱い。友は自ずと去っていく。

そのため、その孺子は食うものに困ることはないが、一人でいる時間が長かった。

こういう孺子は自ずと、思索に耽る時間が長くなる。思索に耽れば、智慧が身につく。そのため、その孺子は聡明であった。もともと、その孺子はうすらぼんやりしている時間も長かったので、その聡明さを悟るものは少なかった。もっぱら、人々は父母のいない時を見計らい、孺子が一足ということをあらゆる意味で攻撃してきた。その一方で、孺子もその者たちの害意を躲す術というものを、年月の中で学びつつあった。

そんなある時、一足の孺子は「夔よ。夔よ」という言葉を耳にした。

その言葉の出所は、常に自分を侮蔑し、時には暴行を振るう同じ年頃の孺子たちの咽喉だった。おそらく、いつもの悪口だろう、と孺子は無視して、その場を立ち去った。

しかし……と、次の日になって、孺子の脳裏に戸惑いが生まれた。孺子は『夔』が何のことを知らなかったのだ。他の者なら、すぐに忘れてしまうところだろうが、一人の世界に閉じこもりがちな孺子には、それが出来なかった。

夔とは何のことだろう。そんなことを考えながら、歩いていると邑の片隅にいた老人に目が止まった。この時代、老人とは悉く、賢人である。それは平均寿命が短く、経験を蓄積した人材が貴重であったというだけではない。この頃、絵画は盛んだが、それだけだ。抽象という概念を考え出すのは、この後の商(殷)王朝の時代であったし、絵画を抽象して文字を作るといふ偉業は、その商(殷)王朝の中葉に起こる。したがって、この頃、文字はその雛形すらない。そして、文字という外部記憶装置が存在しない世界では、経験の他に知識というものは存在しないといても過言ではない。そう考えると、老人が悉く賢人であるというよりも、賢人が悉く老人であるといった方がよいかもれない。

そこで、孺子は尋ねてみた。お教え下さい、夔とは何ですか、と。

「夔とは無支祈の類だよ」

老人はさらりと答えた。孺子はいささか驚いた。あまりにも老人の口が澁みなく、すらすらと言葉を紡いだからだ。老人は知識が有るが、鋭敏には欠ける。孺子はそう思っていた。いや、少なくとも、孺子が見てきた老人は悉くがその類だった。そういえば、この老人はこの辺りでは見かけない顔だった。しかも、よく見ると、老人は不思議な眼をしている。これはまるで……。

「尋ねたいことはそれだけかね？」

老人の清冽な一言に孺子の疑念は断たれた。

「いえ、残念ながら、私は無支祈という言葉も知りません」

再びの問いに老人は答えた。『無支祈』とはすなわち『祈り支えられることの無

きもの』の意だと。より正確には『既に』祈り支えられることの無くなったもの』のことだと。

「かつては祈られた……ということは、無支祈とは神の名なのでしょうか？」

「昔はな。神は祈られることで神でいられる。祈りによって、支えられるものこそが、神であるといえるかもしれぬ」

老人の考えに孺子はさらに驚いた。当然のことだろう。この老人の発想は後の唯物論的弁証法に通じるところがある。年輪だけで得られるものではない。時代を超越した慧眼の持ち主というべきだ。

——この方は賢聖かもしれない。

孺子は己の師父とすべき人と出会ったと思った。そして、孺子はさらに老人の言葉を望んだ。

「しかし、無支祈はもはや祀られぬ。祀られぬ神は神ではない。したがって、その神は神ではなくなった神といえる。言わば、妖だ」

「なるほど、『無支祈』とは放逐され、忘れ去られた古き神の名残というわけですね」

「ほう、お前は聡いな。夔よ」

老人は微笑んだが、孺子はいい気分がしなかった。おそらく、その夔が自分のことを示している事を察したからだ。老人は自分を褒めているのかもしれない。だが、尊敬し、師父と仰ぎたく思った人間が、自分を軽蔑し、自分も軽蔑しているものたちと同じ言葉を口にするのは、孺子の心に鋭く刺さったのである。

「無支祈が古き神の名残であることはわかりました」と、心の痛みを隠して、孺子はさらに問いかけた。「では、夔とはどのような神だったのですか？」

「放逐された時に、蔑視されたのかもしれないが……要するに一本足の化け物だ」

「なるほど、故に私は夔ですか……」

一足の孺子はクツクツと笑った。自分は妖にも神にも足りえる。そんな気がして、不思議な高揚感に包まれたのである。

すると、老人はその笑みを興味深そうに眺めながら、「闇人こんじんと呼ばれるものを知っているか？」と逆に問いかけた。

一足の孺子は頷く。

闇人とは宮殿などの門を守るもの、すなわち、門番のことである。が、後に闇人は門構えに昏いと書かれるようになる。すなわち、門にいる目昏めくら(盲)の意だ。上古においては、門番に視覚障害者を採用していたのである。

「では何故、闇人は盲人でなければならぬ？」

「闇人は目が見えぬ故に、目によらずして、見ることができずからでしょう」

「では、夔よ。夔には足が足りぬ。足が足りねば、歩むことが遅くなる。足によって、遠方に己の意を伝えることはできない。ならば、夔は足によらずして、遠方に己の意を伝えられるかも知れぬな。夔は何によって、意を遠方に伝える？」

「……声、音によって、意を伝えたく思います」

孺子の答えに老人は満足げな微笑を返した。

「よからう。夔よ、夔に音を、楽を教えてやろう」

それから、老人はふらりと現れては、孺子に楽礼を教えた。孺子は前触れもなくふらりと現れる老人を訝しんだ。もしや、神仙の類かと勘繰った時期もあった。しかし、じきに習う愉しさに浸り、学ぶ愉しさに目覚めるようになった。

そして、十載の時が流れる。かつての孺子は老人を超えるまでの楽礼を身に付けた。そのうち、邑の祭祀も任されるようになる。そして、その楽礼の見事さは後に

——六律を正し、五声を和し、以って八風に通じる。『呂氏春秋』

と讃えられ、あるいは

——石を撃ち石を拊たば、百獸率く舞う。『書経』

と伝えられるほどであった。

ある日、いつものように老人がふらりと現れた。

「夔よ」と師父は既に青年となっていた一足の弟子に呼びかける。既に一足の青年の名は「夔」で定着している。

「私に楽正として、仕えんか？」

突然の言葉に一足の弟子は驚いた。楽正とは楽官、音楽を司る高官とでもいべき存在である。そして、祭政一致、神権政治のこの時代、祭祀に深く関わる楽官は、高級官僚であり、高位聖職者であった。そんな楽正に軽々と任命してやるという。この老人は一体何者なのだろう。前々から、只者ではないとは考えていたが、どうやら、庶人ではなさそうだ。

弟子は師父に、初めて会った時からの思いをとうとう口に出した。

「師父よ。できれば、その前に師父の名をお教えいただきたいのですが……」

「私か、私は重華というものだ」

「重華……なるほど、師父の眼は華が重なったようにも見えますね」

「うむ。また、若い頃は動作が機敏で華やかだった故に、俊舜とも呼ばれるな」

夔ははつとし、慌てて伏した。

「后きみよ……！」

舜とは有虞氏の長。後に五帝の一人にまで祭り上げられた偶像の原型である。

——哀公、孔子に問いて曰く「吾聞われく、夔は足が一つなりと、信乎？」と。曰く「夔は人也。何故、足が一つ。彼は其の他と異なる無し。而して獨ひとつ聲通る。堯曰く、夔、一つにて足るとして、樂正な爲さしむ。故に君子曰く『夔は一つにて足る有れど、一つの足に有らざるなり』と。『韓非子』」

かくして、一つの足の赤子は、一つにて足る大人となった。